

小笠原ドキュメンタリー映画『心も丸木舟に』に見る 翻訳論上の問題

——言語学観点からの考察——

今村圭介

1. はじめに

本論では、小笠原ドキュメンタリー映画、『心も丸木舟に』を翻訳した際に生じた問題点を言語学的観点から考察し、翻訳論を論じる。日本語と英語は様々な面で異なる言語であり、翻訳の際に失われてしまう情報があるのは避けられないことである。しかし、翻訳では訳語で意味を伝えるという制限の中で、原語での表現を最大限、訳の言語で表すことが求められる。『心も丸木舟に』の翻訳の際には、そうした点で配慮が必要な問題がいくつか表れた。それらは、主語と視点の問題、言語変異の問題、固有名詞の翻訳表記の問題であり、次章以降で個々について言語学観点を交えて論じることとする。

2. 主語と視点の問題

まず、主語と視点の問題について論じる。日本語は主語が文に必ずしも必要のないいわゆる pro-drop 言語であり、英語はほとんどの文で主語が必要な言語である。そうした違いが翻訳の際に問題になる事が見えた。

2. 1 日本語の主語と英語の主語

まず、問題の所在の前に、主語に関して日本語と英語の違いについて考えてみたい。日本語は主語を明記する必要がない言語である。そもそも主語が日本語に存在するのかという論が、三上（1960）が主語の存在を否定して以降、長い間議論がされてきた。主語という概念が必要かの議論はここでは置いておくが、日本語の主語と英語の主語は異なるものであることは明らかである。日本語では主語を入れることによって、強調がされたり、不自然な文になることがある。二つの例文を見てみよう。

例1 どうしても食べたくなくなってしまうのはなぜ？

例2 ソースのヒミツをちょっとだけお教えしましょう。

もしこの文に主語を入れてみたらどうなるだろうか。

- 例1' どうしても私たちが食べたくなくなってしまうのはなぜ？
 例2' 私がソースのヒミツをちょっとだけお教えしましょう。

例1の『私たち』は文から自明のもので、主語を入れることによって、幾分強調のような印象を受ける。例2についても、何か特定のキャラクターが発言しているような、個人を主張している立場を印象として受ける。つまり、主語がなくても日本語の文の「誰が」ということは自明である場合が多く、主語を明示することは「誰が」を強調することにつながる。しかし、英語の場合はほとんどの文で主語が必要である。

- 例3 Why is it just can't help feeling like we want to eat this?
 例4 I will tell you just a bit of the secret of the sauce.

これを次のような形に変えると非文になる。

- 例3' *Why is it just can't help feeling like we want to eat this?
 例4' *will tell a bit of the secret of the sauce.

つまり、主語を入れるかは日本語では選択的であり、英語では義務的となる。それでは映画に現れた、次のような文はどう訳せばいいだろうか。

- 例5 7時、朝食。家族、友人の心のこもったおにぎりや、つけものをほおぼる。(ナレーションの発話)

これは、クルーがカヌーで父島を出発した後、カヌーの上で朝食を食べている場面のナレーションの発話である。この文には主語がないが、主語を入れないことによって、ナレーションの微妙な立ち位置を表現している。第三者の外からの視点からクルーの行動を語るのではなく、クルー自身が回想のように語っているのでもない。内輪であるクルーの説明を当事者がナレーションしているというものであり、非常に曖昧な視点となっている。そうした視点が、主語がない形（ゼロ主語）で表れるのだが、ゼロ主語はクルーに近い視点でもありうるし、遠い視点でもありうる。つまり、図1のイメージで表されるように、日本語ではゼロ主語でカバーできる視点的範囲が広い。英語では主語として必ず We もしくは They を文に入れる必要があり、日本語でゼロ主語で表されている視点は英語の They の視点も We の視点もカバーする。

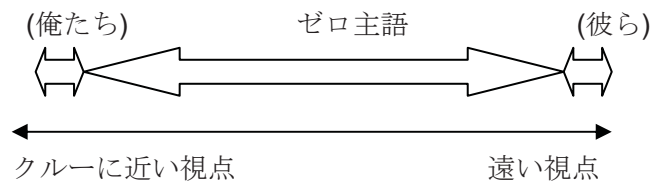


図1 日本語における各表現形式の視点的範囲のイメージ

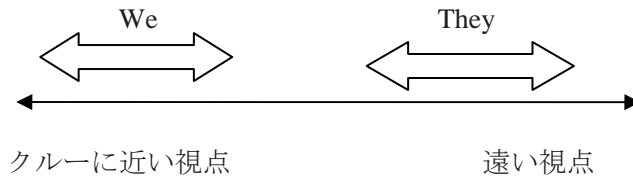


図2 英語における各表現形式の視点の範囲のイメージ

そのため、ゼロ主語の文にやむをえずに We か They のどちらかを使用することになる。例5では視点がクルーに近いので、ゼロ主語を We として翻訳することができる。

例6 We shove the food from our families and friends, the rice balls and pickles, into our mouths.

ここまではゼロ主語が表れた文に They か We のどちらかを選択するだけで大した問題ではない。

2. 2 主語と視点の問題

しかし、似たようにゼロ主語が現れる文で、クルーから遠い視点、つまり英語で They を置くのが適切である文が現れたときに問題となる。ナレーションは一貫してゼロ主語を使い、語り口を変えていないが、ゼロ主語でカバーしている視点が大きいため、そうしたものが現れる。まず例を見てみよう。

例7 時々、水をかけ合う。ふざけている、という訳ではないのだが、実際そうとしか見えない。

例7の場合、「そうとしか見えない」という表現から明らかなように、外からクルーを観察している視点で、主語を They として翻訳することが適切であると考えられる。しかし、They と We を同一のナレーションで使用することになり、ナレーションの語り口や立場がわからなくなってしまう恐れがある。それだけでなく主語の変化による視点の移動から、We と They が誰を指しているかさえもわからなくなる可能性も出てくる。そのため、英語で They と We の両方を採用することは避ける必要が出てくる。つまり理論的には、日本語のゼロ主語文を翻訳する際の英語の主語の対応は、次の図3の上のようになるが、これは採用ができない。図3の下のように、翻訳での理解を優先するために、文を若干補正して同一の主語を使い、視点の統一を図ることが必要となる。

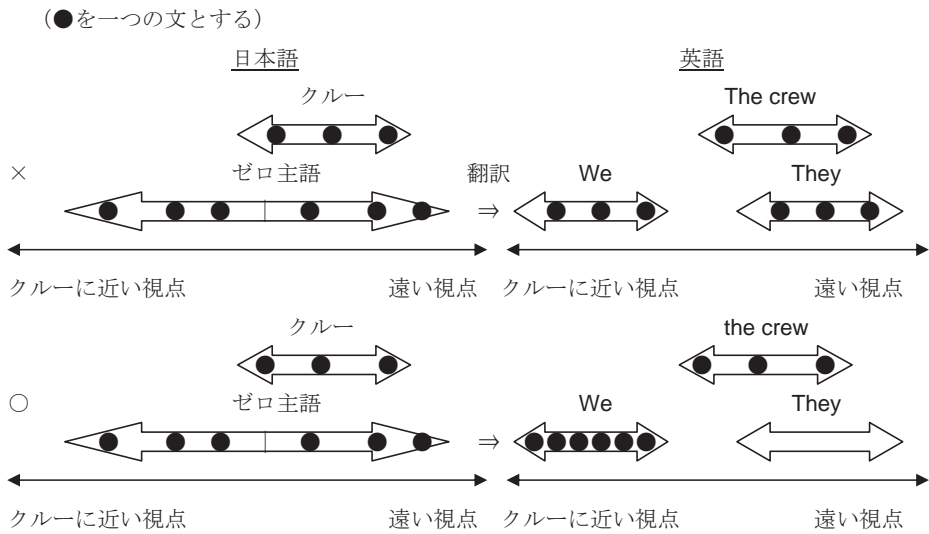


図3 ナレーションの日本語での視点と英語での視点の対応のイメージ¹⁾

結果として、先ほどの例は次のようにした。

例8 Sometimes we splash water on each other. This is not just playing, even though that is how it may appear.

例8では「そうとしか見えない」という文をそのまま直訳するのではなく、外からの見た「It may appear」という内からの表現に変えて訳す。それによって、Weの使用が不自然でないようにした上で、ナレーションの視点の統一を図っている。

英語と日本語の主語に関する違いは、言語の構造的な違いであるため、翻訳で同一の視点を表すことはできない。ナレーションの語り口では特にこの問題が表れるだろう。

3. 言語変異の問題

次に、言語変異の問題を論じる。ひとつの言語の中には必ず何らかのバリエーションが存在する。バリエーションは、様々な言語レベルでの多様性を指すが、翻訳では特に、音・語彙等のレベルの言語変異²⁾が問題となる。この言語変異の翻訳について、話者間変異(方言)と話者内変異(スタイル)という枠で考えてみたい。

3.1 話者間変異の扱い

まずは、話者間で現れる変異の翻訳での扱いを考えてみる。日本語は、話者間の言語の差異が大きい言語である。そのことは映画に出てくる二人の話者の発話を見てみれば明らかである。

例9 帰化人は一人乗りだよ。もう、キリスト教お参りして、ちゃんとして、9時10時に釣りにいくの。さわらを。主にさわらを釣るんだから。結局親子で仕事をしていたからね。手伝って、家大工を置いて、舟の方に力入れた。(大工の発話)

例10 ミクロネシアや、メラネシアのパドルはああいうパドルはあまりないんですね。恐らくハワイのパドルの形の名残じゃないかなと感じております。(学者の発話)

どちらもの発話も特別な言語表現を使っているわけではないが、丁寧体と普通体や終助詞などが異なる。英語には、こうした文法変化がないが、語彙や音韻などに違いが見られるため、職業の違いによるバリエーションもある程度表すことはできる。しかし、翻訳ではそうした異なるバリエーションを話者に使うことは避けられる。

ロング・朝日（1999）では、映画が英語から日本語の吹き替えに翻訳されている場合の方言の扱いに関して考察しているが、方言の使用のされ方について次のような図を用いて説明している。

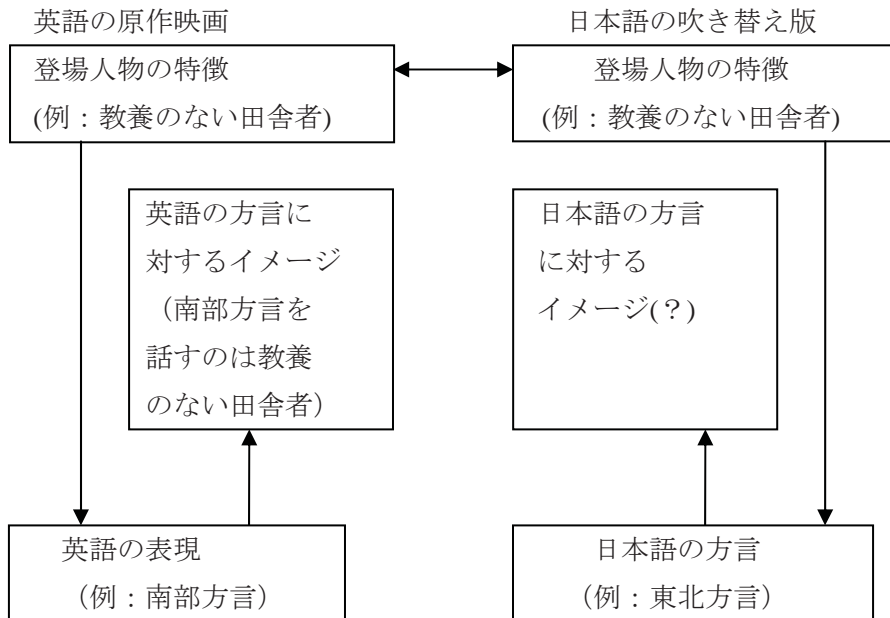


図4 翻訳における登場人物と方言イメージ（ロング・朝日 1999 の図を転載）

つまり、ある登場人物に別の登場人物と異なる何らかの特徴があり、それが特徴的な言語使用で現されているとき、翻訳先の言語でも似たように特徴的な言語使用をさせるということである。ロング・朝日（1999）は、ある方言を話す話者の集団が中心になる映画では、吹き替え先の日本語では方言ではなくて標準語が使用されていると発見し、吹き替えでの方言使用は登場人物の特徴づけのために行われると考察している。

先ほどの例の場合、大工と学者が違ったしゃべり方をするのは認知できるが、それに大した意味も感じない。そうした異なる話者間の変異はごく当たり前であり、気に留める点ではない

ため差異を表す意味が無い。そのため、話者間変異の差は表す必要がない。

- × 全ての差異⇒翻訳による表現
- 意味のある差異⇒意味の抽出⇒翻訳による表現

3. 2 話者内変異（スタイル）とその切り換えの問題

ここまでは、話者間の言語変異の翻訳での扱いを見てきたが、翻訳において問題ではなかった。問題となったのは、話者内変異（スタイル）が存在し、それが切り換えられる時である。一つの例を見てみる。

例 11 なんせ、頑張っても5ノットくらいしかでねー。（ナレーションの発話）

一貫して標準的なスタイルで話してきたナレーションであるが、ここでは突然、標準形式「ない」ではなく非標準形式「ねー」を使用している。話者が同一の状況で異なるバリエーションを使った場合、何らかの表現効果を期待して、そうしたシフトが行われることが多い。ここでも、非標準形式「ねー」を使用したのには理由があり、翻訳でもできる限り同じことを表現したい。日本語ではスタイルの差を利用して、シフトすることで何らかの表現をすることがあるが、英語では文法的なスタイル差が小さく、そうした意図的な切り換えは見られない。つまり、同一の切り換えを行うことによって面白さを表すことは英語では不可能であると言える。

そのため、ここで表現されていることを、別の方法で表現するという代替案を考える。一つの案として、切り換えをクルーの気持ちへの近づきと捉え、それを表現することである。対話において話者がスタイルをシフトする要因説明として Giles (1984) のアコモデーション理論という理論がある。話し手が聞き手に共感していれば、話し手の言語が聞き手の言語に近づくという理論だが、ここでは似たようにナレーションがクルーのスタイルに近づけて、視点の近づきを表していると捉える事ができる。しかし、今回はすでに2節で述べたように、視点をクルーに近い We で統一しているためにすでにクルーに近い視点になっていると言える。

代わりの案として、映画の中でクルーの一人の発話を翻訳する際に独特のスタイルを持たせ、同じスタイルを該当のナレーションの箇所を使うことで面白さを伝えることはできるかもしれない。しかし、先ほど述べたように、一人の話者に独特なスタイルを使わせるとは、その話者に異なるイメージがついてしまう為できない。

また、別の案としては、男性的で待遇レベルの低い「でねー」という表現と似たように、待遇レベルを落とす卑罵表現 (Swear words) の使用が考えられる、比較的タブー度が低いと思われる damnなどを文中に挿入し文末にエクスクラメーションマークを入れることで、非標準への切り換えが表せる。しかし、特定の社会的属性（敬虔なクリスチャン、小さい子ども、礼儀正しい女性など）にはそうした言葉の使用は受け入れられないものであるため、卑罵表現は扱いに慎重になる必要がある。その上、急に卑罵表現を使用することで、ここでの切り換えの意図が果たして伝わるかも少々疑問なところである。

つまり、英語においてこのスタイルシフトの面白さを伝えるのは非常に問題が多い作業であるという事が言える。

4. 固有名詞の翻訳における表記

次に本節では、翻訳における固有名詞の表記の方法について考えてみる。固有名詞の表記は、主に誰を対象に表記するのか、どのような情報を伝える必要があるのかが表記の方法を左右する。さらに、固有名詞に小笠原の多言語文化の背景を含んでいるため、それを伝えるための工夫が必要であった。

ロング（近日刊行）で述べられているように、小笠原の言語文化は異なる言語を持つ複数の入植者から始まった。そこでビジン英語が発生し、今なお、欧米系島民の間で英語が使用されている。近年では日本語モノリンガル化が進んでいるが、そうした歴史から、英語起源の語彙が多く残る。

今回問題となったのは「ジョンビーチ」、「豚海岸」、「ハートロック」、「四本岩」である。まずは、通常の翻訳の場合に、固有名詞にどのような表記の仕方があるのかを見てみる。固有名詞の表記の仕方には次のような4タイプが認められると思われる。

表1 固有名詞の翻訳表記の4タイプ

表記のタイプ	日本語	翻訳
1 全体ローマ字表記	首都高	Shutoko
2 固有部原語表記 + 性質部翻訳	富士山	Mt. Fuji
3 全体ローマ字表記 + 性質部翻訳	天神通り	Tenjin dōri st.
4 全翻訳	東京都立大学	Tokyo Metropolitan University

各タイプの使用傾向を考えると、全体ローマ字表記は、主に、性質を表す部分が固有名詞の一部となり、それがなければ意味がほとんど取れないものに使われる。「首都」「天神」と聞いても「首都高」「天神通り」は想像できない。対して、「富士」は「富士山」の知名度から、ある程度想像できる。性質部が翻訳される場合は、もちろん固有名詞がどのような性質のものであるかを伝えるためである。「首都高」などは、運転するときに見る表記であり、日本に長く住む外国人でないと、それを見る機会がないと思われる。そのため、固有名詞をそのまま表記してある（のかもしれない）。

今回の場合で、まず「豚海岸」「ジョンビーチ」を扱うと、「ジョンビーチ」は「John」という人名に関係した、英語起源の地名であり、そのまま表記ができる。「豚海岸」は「海岸」が「kaigan」と表記しても日本語を話さない多くの人にはわからないため、2か3のタイプの表記方法になる。

ジョンビーチ⇒ John Beach

豚海岸 ⇒ Butakaigan Beach・Buta Beach

ここで、「ジョンビーチ」と「豚海岸」のように。英語起源の固有名詞と日本語起源の固有名詞

が小笠原に存在することを表すことを考える。上の表記では「John」と「Buta」の対照がすでにあり、少なくとも地名に異なる二つの言語が使われていることがわかる。それだけでも小笠原の多言語状況を表しているが、「海岸」と「ビーチ」の対照も表すほうがより厳密に表せる。Butakaigan Beachでは「海岸」が「ビーチ」と同義かどうかは日本語がわからないものにはわからないため、その対照がわからない。そのため、今回は Buta Kaigan (Buta Beach) とすることによって、John Beach との日本語、英語の地名の対照を可能とした。

また「ハートロック」「四本岩」も同じような表記方法をとったが、地名の起源を考えて表記方法を少し変えた。「ジョンビーチ」が John という人から発生した固有名詞であるのに対して、「ハートロック」は小笠原の歴史とは関係なく近年できた固有名詞である。そのため、二つは日本語として次のようにローマ字表記した。

ハートロック⇒ Hāto Rokku (Heart Rock)

四本岩⇒ Shihon Iwa (Shihon Rock)

こうすることによって、個々の固有名詞の特徴を明確に現すことができたのではないだろうか。

このように、細かいところではあるが、固有名詞の扱いは小笠原の歴史を少しでも現す手立てにもなるために、扱いには少々慎重になる必要がある。

5. まとめ

本論では、映画『心も丸木舟に』を題材にして、言語学観点から、翻訳における主語と視点に関する問題、言語変異の問題、固有名詞の翻訳での表記の問題の扱いに関して論じてきた。それぞれ細かい表現の部分であり、翻訳で全てを表すことが難しい。そういった中で最大限、原語の表現を伝える可能性を考えることが翻訳では重要になってこよう。

注

- 1) 本文で詳しく触れていないが、主語がクルーのものは the crew に対応させた。代名詞 We と They の両方の使用は混乱するが、the crew は指示対象がはっきりしているため、ナレーションの視点がぶれない。
- 2) 用語の扱いは渋谷 (2007) を参考にした。

参考文献

- 渋谷勝己 (2007) 「なぜ今日本語のバリエーションか」『日本語教育』134
- 三上章 (1960) 『象ハ鼻ガ長イ』(増補版(1964)から『象は鼻が長い』) くろしお出版
- ロング・ダニエル (近日刊行) 『小笠原における、日本語・英語・混合言語-欧米系島民が使い分ける三つの言語体系-』
- ロング・ダニエル, 朝日祥之 (1999) 「翻訳と方言—映画の吹き替え翻訳に見られる日米の方言観」『日本語学』18-2

小笠原ドキュメンタリー映画『心も丸木舟に』に見る翻訳論上の問題（今村）

ロング・ダニエル，橋本直幸（2005）『小笠原しゃべることば辞典』南方新社

Giles, H. (ed.) (1984) The Dynamics of Speech Accommodation. *International Journal of Sociology of Language* 46.

